様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １４ 日現在

機関番号：１２１０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2017
課題番号：２５３７０１５７

研究課題名（和文）欧州の木彫表現についての研究，および日本の木彫表現との比較

研究課題名（英文）Research on wood carving expressions of Europe and a comparative study of European and Japanese wood carving expressions

研究代表者
大原　央聡（OHARA, Hisaaki）

筑波大学・芸術系・准教授

研究者番号：８０３６１３２７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は欧州において古代から石材等が中心であった文化において、石彫やブロンズ彫刻の中で、独自の発達を遂げた木彫について実見調査・研究を行った。海外での実見調査は欧州及びその作品があるアメリカ合衆国において合計４回行った。そして欧州のその特色ある木彫表現と木材中心の文化である日本の木彫表現との比較を行うことにより、現代における新たな木彫表現について、制作者の立場から実制作の事例を通して、さまざまな表現の可能性を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This research study explores wood carvings that were uniquely developed amid stone carvings and bronze sculptures in Europe, whose culture primarily was centered on stone since ancient times. Four overseas field studies were conducted in Europe and in some places in the US, where authentic wood carvings of Europe could be found. Comparing the characteristic expressions of wood carvings of Europe and that of Japan, whose culture has centered on wood, the possibilities for new wood carving expressions for the present day were clarified from the perspective of a sculptor through observing the different cases of wood carving production.

研究分野：木彫表現

キーワード：木彫表現

１．研究開始当初の背景

これまで日本では、欧州の木彫に関する展覧会や研究は積極的に行われてこなかった。それは欧州の彫刻作品は石彫やブロンズによるものが中心で木彫は少数であること、また、展覧会に関しては、温度、湿度管理が難しい木彫作品であるが故、海外からの運送上のリスクが大きいことが理由である。しかし近年では、2002 年には、ジュリアーノ・ヴァンジ（Giuliano Vangi　2002 年　第 14 回高松宮殿下記念世界文化賞）個人の美術館が日本で開館し、2005 年にはシュテファン・バルケンホール（Stephan Balkenhol　1957～）、2006 年にはエルンスト・バルラハ（Ernst Barlach 1870～1938）と次々に欧州の木彫家による展覧会が開催されている。2012 年、来場者が 30 万人を突破した「ベルリン国立美術館展」では中世後期ゴシックの祭壇彫刻家ティルマン・リーメンシュナイダー（Tilman Riemenschneider 1460～1531）による木彫作品が複数点会場に陳列されることとなった。それはイタリア、ドイツをはじめ欧州の文化・芸術を享受したいという日本における社会的ニーズの高まりといえる。とりわけ木の文化を持つ日本人の感性を欧州の木彫作品が刺激したといえる。これまで日本で紹介される機会は少なかったが、その卓越した造形感覚、手仕事による素材との関わりは、日本の古くからの造形制作と共通点を見いだすこともできる。一方で明らかに日本的な木の扱いと異なる要素も見ることができる。

日本の木彫作品についても 2010 年に「橋本平八と北園克衛展」2010-2011 年に「彫刻家　辻晋堂展」2011 年に「彫刻の時間　継承と展開」と立て続けに国公立の美術館において日本の近代・現代の木彫作品が紹介され、日本の木彫文化に対する再認識・再評価の気運が高まってきている。そこで同じ木彫家の視点でこれらの木彫作品について、研究を行うことについて意義は大きいと考えた。

２．研究の目的

歴史的に日本が木の文化だとすると、西洋は石の文化といえる。彫刻に於いても、大理石、花崗岩等を中心とした石材による彫刻が中心といえる。西洋では立体の形体追求に於いても、それらによって育まれた石材の扱い・手法が根底にあるといえる。一方、日本には良質の木材による優れた彫刻が有史より存在する。日本は独自の木彫仏や木彫による神像・肖像彫刻を多数生み出してきた歴史がある。本研究は古代から石の文化である欧州において独自の発達を遂げた木彫について調査・研究を行い、木の文化である日本の木彫表現との比較を行うことにより、現代における新たな木彫表現について制作者の立場から実制作を通して可能性を明らかにしていくことを目的とした。

３．研究の方法

欧州での石の文化の中で成長した木の表現方法を調査・研究し、日本の木彫と対比することにより、日本の木彫文化を再認識し、見直すことができると考えた。まず、欧州の木彫についての調査・研究のため、平成２５年度から平成２８年度にかけて、全４回の海外での調査を行い、日本の木彫についても併せて調査・研究を行った。その資料を基に欧州の木彫と日本の木彫との比較研究を行い、そこから木彫における欧州と日本の造形意識の違いや共通点等を明らかにし、自分自身が、研究者・制作者として、木という素材による、欧州と日本文化の相互の造形意識の融合により、新しい造形的試みを行った。

４．研究成果

研究のための資料収集として以下の調査等を行った。

（１）平成２５年度、第１回目の現地調査として、6～7 月にドイツ（ミュンヘン、ローテンブルク、ヴュルツブルク、ニュルンベルク、フランクフルト、グロスオストハイム、ハイデルベルク、マンハイム）、オランダ（アムステルダム、オッテルロー、アイントホーフェン）において欧州の木彫作品について調査を行った。ドイツではバイエルン国立博物館、聖ヤコブ教会、ゲルマン国立博物館、新美術館、マインフランケン博物館、クルトゥールシュパイヒャー博物館、聖ペーター＆ポール教会、プファルツ選帝侯博物館、クンストハレ・マンハイム、シュテーデル美術館、オランダではアムステルダム市立美術館、クローラー・ミュラー美術館、ファン・アベ美術館等で調査を行った。彫刻家はティルマン・リーメンシュナイダー（ミュンヘン、ヴュルツブルク等の都市）エルンスト・キルヒナー（フランクフルト、オッテルロー）、オシップ・ザッキン（アムステルダム、アイントホーフェン）、マリノ・マリーニを中心として実見調査を行い基礎資料とした。特にティルマン・リーメンシュナイダーについては各都市で多くの作例を調査することができ、作品画像も多く収集することができた。また、マリノ・マリーニの木彫は比較的大型のもので、寄せ木も多く行われていた。

（２）平成２６年度、第 2 回目の現地調査として、6～7 月にノルウェー王国（オスロ）、スウェーデン王国（ストックホルム）、チェコ共和国（プラハ）、スロバキア共和国（ブラチスラバ）、オーストリア共和国（ウィーン）の５カ国において、欧州の木彫作品について調査を行った。ノルウェー王国ではヴィーゲラン美術館、国立美術館、歴史博物館、スウェーデン王国では大聖堂、北方民族博物館、国立美術館、現代美術館、チェコ共和国では国立美術館、スロバキア共和国ではスロバキア国立ギャラリー、ブラチスラバ市ギャ

ラリー、オーストリア共和国では美術史博物館、アッパー・ベルヴェデーレ、レオポルド美術館等で調査を行った。欧州でも北欧と中欧を中心に実見調査を行い基礎資料とした。特にグスタフ・ヴィーゲラン（Gustav Vigeland,1869-1943）は塑造またはそこから素材転換を行った石彫の作家として有名であるが今回、チーク材による希少な木彫作品を実見することができた。ヴィーゲラン特有の細部を単純化し大きくまとまりのある石彫のフォルムとは違う木彫ならではの表現を見ることができた。ヴィーゲランは塑造のあるいは塑造を原型とした石彫の作品が一般に知られる作家である。その多くの作品は塑造から型取りされたブロンズ像か塑造から星取り法で石職人により石材に彫られた石彫像である。しかしオスロの国立美術館にある《夢遊病者》（1909 年）はチーク材による木彫像である。石彫像では形態の単純化・細部の省略が行われている場合が多いが、この木彫像は細部まで克明に表現されており、細かな仕上げがされている。ヴィーゲランの石彫は表面を平滑にし、細かな凹凸をならし、大きなマッスでの表現がされているが、木彫像はヤスリ等ではなく、刀により細部まで入念に仕上げられているのが特徴的である。

また、チェコ共和国のフランチシェク・ビーレク（František Bílek, 1872-1941）の作品について日本ではほとんど紹介されておらず、画像を含め今回多くの資料を収集することができた。オーストリア共和国（ウィーン）でのフランツ・バービック・デァ・エルテル(Franz Barwig der Ältere, 1868-1931)の木彫は軟材から超硬質な材まで幅広く使用し、刀のみの仕上げ、ヤスリ等の使用により表面を磨き込んだ仕上げと、材によって一人でさまざまな造形を行っていた。

（３）平成２７年度、欧州における木彫について、その欧州の木彫作品であっても重要な作品の一定数がアメリカ合衆国に渡っているため、作品及び作品に関する資料を収集するために、アメリカ合衆国の該当する施設や場所において調査を行った。ニューヨークではクロイスターズ美術館、メトロポリタン美術館、ホイットニー美術館、ニューヨーク近代美術館、フィラデルフィアではフィラデルフィア美術館、バーンズ財団美術館、ワシントン D.C.においてはナショナルギャラリー、ハーシュホーン美術館、スミソニアン・アメリカ美術館、ボルチモアではウオルターズ美術館、ボルチモア美術館において、木彫作品について調査を行った。特にウオルターズ美術館では明治から昭和時代前期の彫刻家である、吉田芳明（1875－1943）の木彫作品が収蔵されており、早くにアメリカへ渡っていた作品であり、保存状態も良く、欧州の木彫と比較する上でも貴重な資料となった。作品に使用されているのは広葉樹の環孔材で木目がはっきりとしている。ずば抜けた描写力で写実的に彫られているが、全て克明に描写しているわけではなく、大まかに面で表現しているところと克明に造り込んでいるところとが混在している。一木で彫られており、顔面には柾目の木目となっている。顔面と手は克明に彫られているが、布で巻かれた頭部、背面の衣服、帯などは平鑿でできる大まかな面で表現されていて、全体的には強弱がありリズミカルな造形となっているのが特徴的である。等身に近いサイズで薄く白い彩色が衣服等に見られる。彩色が薄いために木肌の質感は残っていて、彩色されているところと、されていないところで変化がありつつも調和している。

（４）平成２８年度、第 4 回目の現地調査として、イタリアにおいて欧州の木彫作品について調査を行った。当初の予定ではアメリカ合衆国での調査であったが、平成 27 年度と平成 28 年度の予定を入れ替えて調査を行った。ミラノではブレラ絵画館、1900 年代美術館、ヴェネツィアではカ・ペーザロ現代美術館フィレンツェではドゥオーモ付属美術館、サン・スピリト教会、マリノ・マリーニ美術館（フィレンツェ）、ウッフィツィ美術館、ピストイアではマリノ・マリーニ美術館（ピストイア）、ローマではヴァティカン博物館、国立近代美術館等において調査を行った。

特にドゥオーモ付属美術館ではドナテロによる聖マグダラのマリア像を実見することにより、像の破損箇所や彩色層の剥落箇所からその彩色層の厚みやわずかではあるが木地の様子を確認することができた。フィレンツェのマリノ・マリーニ美術館では意図的に特徴のあるノミ痕を使い分けている、マリノ・マリーニの木彫作品《水泳選手》を実見することができた。

（５）これまで行ってきた欧州での実見調査や収集した資料を整理し、考察を行い、欧州の木彫と日本の木彫との比較研究を行った。その結果から導き出されたことは、欧州では木彫であっても、石材の扱いから由来した造形手法が多く存在している点である。それは中心に向かった視点が連続的、継次的につながって量塊を構成している事例である。対して日本では鋸等の道具による仕事から由来する強く面を残した表現で全体が構成されている場合が顕著であることであった。しかし、例外も多く、ヴィーゲランは石彫では所謂「求心的な形態観による表現」を行っているにも関わらず、木彫では日本的な仕事に近い表現を行っていた。ヴィーゲランは原型塑造から石材への素材転換に石工職人の協力も得ていたことも関係している可能性もあるが、ここまで素材により表現が全く変わってしまうことは非常に想定外であった。また、フランツ・バービック・デァ・エルテルは同じ木彫での表現であっても、樹種が変わることにより、さまざまに表現方法が変化してい

ることも同じく想定外であった。エルテルは使用する木材の樹種によって表出する形態に変化を持たせている。特筆すべきは、同じモチーフについて樹種を替えてそれぞれで違う造形的アプローチをしている点である。マラブー（アフリカハゲコウ）を西洋シナノキ材では大きな面での表現を行っているが、一方で、クルミ材では部分的に磨いて写実的な表現をしている。また、同じ樹種でも異なった表現を試みている。軟質な材である西洋シナノキ材では強い面での表現で制作している場合が多いが、同時に別の作例では同じ材でもヤスリで削り、表面を磨き、張りのある量の表現も行っている作例があった。比較的硬質ではあるが中庸な堅さのクルミ材では、作品の多くは表面を研磨され滑らかな処理をされている。前出の西洋シナノキ材の多くは刀による面での表現をしている。表現としては面の表現であるが、正確には平鑿によるフラットな面ではなく、日本の道具でいうところの極浅丸の刀や浅丸の刀による、わずかに凹面で、大まかには面としてとらえることのできる「面」の表現になる。エルテルのこれらの事例はこれからさらに研究対象となりうる興味深いものとなった。

また、欧州の木彫表現と日本の木彫表現との比較から生まれる新たな木彫表現について、実験制作を行った。その研究成果の発表として制作研究の成果を公開した。展覧会「大原央聡　河西栄二　木彫展」を筑波大学大学会館総合交流会館において開催し、考察の結果としての実験制作について、研究代表者の大原央聡と研究分担者の河西栄二の木彫作品を展示し、制作者の立場から実制作を通した考察について、欧州と日本の木彫表現を拠り所にさまざまな造形的な試みを提示することができた。(図 1)(2017 年 9 月 23 日（土）～9 月 30（土）) 具体的には大原央聡は欧州の木彫制作に見られる造形的特徴と日本古来の造形観の融合を目指した。作品《顔を広げようとする人》（ケヤキ　彩色　H.183×W.98×D.52（cm）第 90 回国展（国画会主催）国立新美術館　2016 年）（図 2）では日本古来の木彫制作法である木取りや鋸で大きく挽き落としてできる面の意識を作品に活かしていくことと、同時に西洋における求心的なフォルムの追求方法、特

図 1　展覧会フライヤー

図 2　《顔を広げようとする人》

にヤスリを用いた形態の詰めを両立させることにより新たな木彫表現の追求を行った。木取りによる大きな面の意識により作品全体の強い構築性を求め、最終的な形体の詰めについてヤスリを使用した連続的な手法と刀による段階的な面の処理を効果的に混在させることを試みた。河西栄二は研究分担者として、欧州の木彫表現の寄木、内刳りについて、自身の制作研究と関連づけて研究を行った。欧州で行われていた、形式、様式によらない自由で機能的な内刳りの方法、材の寄せ方は実際に制作を進める上で参考になるばかりではなく、造形観にも影響を与えるものであった。実際に自己の制作では様々な樹種を選択し、寄木や内繰りの手法を工夫することで、丸太の形態や強度の限界を超えた表現の可能性を示した。《ヒト》（クス H.200 × W.70 × D.70(cm)81 回新制作展 2017 年）（図 3）では、クスの丸太を使用し、両腕のみ別材を用いている。両肩と臀部から内刳りを施し軽量化を図り（図 4)、腕は取り外し可能な構造とし、移動の際に細い手首や指先に負担がかからない仕様としたために、足首を極端に細いプロポーションとすることが可能となった。

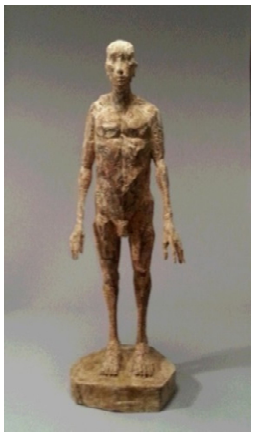

図 3　《ヒト》

図 4　《ヒト》の内刳り

作品展示と併せて、同会場にてポスター展示を行い、これまでの研究成果について発表を行った。

5．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

なし

6．研究組織

(1)研究代表者
大原　央聡（OHARA HISAAKI）
筑波大学・芸術系・准教授
研究者番号：80361327

(2)研究分担者
河西　栄二（KASAI EIJI）
岐阜大学・教育学部・教授
研究者番号：60302402